静岡県文化プログラム推進委員会委託事業

Ⅶ 個別事業の詳細評価（濃い評価）

UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川 2020

— 目次 —

評価概要（エグゼクティブ・サマリー）.....116
1.団体概要　特定非営利活動法人　クロスメディアしまだ.....116
2.事業概要（評価対象）　UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川.....116
3.事業評価の概要.....116
3-1.アーティストが、地域住民が気づかない視点の提示、地域の魅力の発掘している.....117
3-2.地域住民が、地域の魅力・価値を再発見する.....117
3-3.地域外からの芸術祭参加者やアーティストが、“地域のおもてなし”を受ける.....117
1.対象事業.....118
1-1.事業の背景・経緯.....118
1-2.事業の特徴.....119
1-3.事業の実施体制.....120
1-4.事業の実施プロセス.....121
1-5.芸術祭の内容　～巡り方～.....122
2.事業評価.....123
2-1.評価結果の活用イメージ.....123
2-2.評価目的.....123
2-3.評価設問　～評価で知りたいこと～.....124
2-4.評価実施体制.....124
2-5.評価の実施スケジュール.....125
2-6.評価結果.....125
2-6.1.UNMANNED の価値の整理.....126
2-6.2.UNMANNED の成功の姿.....128
2-6.3 セオリー・オブ・チェンジ.....129
2-6.4.評価グリッド　～価値を測定するための計画表～.....129
2-6.5.ルーブリックと価値判断　～アウトカム評価を行う～.....130
2-6.6.UNMANNED の参加者情報.....138
2-6.7.UNMANNED の参加者アンケート分析.....139
2-6.8.事業の持続発展性に向けての教訓抽出.....141
3.まとめ・今後の提言.....143
3-1.まとめ.....143
3-2 今後の提言.....143

評価概要（エグゼクティブ・サマリー）

1.団体概要　特定非営利活動法人　クロスメディアしまだ

2016 年に設立されたクロスメディアしまだ（代表理事：大石歩真）は、静岡県島田市に拠点を持つ非営利団体で、「スキだらけのマチづくり」をビジョンに、地域情報の発信、地域活性化に対する取り組み、地域コミュニティの構築に向けた取り組みなどを行なっている。

2.事業概要（評価対象）　UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川

評価対象は「UNMANNED（アン・マンド） 無人駅の芸術祭/大井川」である。2017 年から静岡県文化プログラム（以下、ブンプロ）等の助成を受けて毎年開催されており、今年は 3 年目である。特に今年度開催のものに主に焦点を当てているが、大井川鐵道の無人駅周辺 （静岡県島田市・川根本町）を舞台として、地域で残された交通手段として大切な資源である一方で、地域で忘れられつつある存在でもある「無人駅」を舞台に繰り広げる芸術祭である。今年は 2020 年 3 月 6 日（金） - 22 日（日）の 17 日間の開催であり、12 名のアーティスト（＋学生団体 1 組）が参加した。来訪者は推計 4,275 名（主催者報告）であった。

主な活動内容	大井川鐵道の無人駅を舞台にした地域の魅力をアーティスト達が多彩に表現する芸術祭
主な活動領域	大井川鐵道無人駅周辺 （静岡県島田市・川根本町）

3.事業評価の概要

本事業評価は「UNMANNED の価値を整理して、持続的な展開の可能性を模索する」ことを目的として行なった。来訪者や経済効果以外の芸術祭の価値を示していく必要がある、という主催側の強い意識からである。はじめに、本芸術祭の重要な関係者である地域住民やアーティスト、大井川鐵道や行政が感じている価値はどのようなものか、その価値を生み出す源泉を把握するためのリサーチを行なった。行政（島田市）からは、「地域の人が、地域の魅力に気がつくための事業であり、地元に対する誇りを取り戻すことができる事業である」とコメントが挙げられた。

次に UNMANNED の活動の成果を把握するために、リサーチに基づいて価値を生み出すセオリー（何がどのようになって価値が生まれるのかを示した体系図）を整理して、それに基づいて成果測定と価値判断を行なった。UNMANNED のキー・メッセージは、「無人駅が開くと、地域が開く」である。UNMANNED によって「地域がどのくらい開かれたのか」が成果であり、それを以下の 3 点と下図ように整理した。

3-1.アーティストが、地域住民が気づかない視点の提示、地域の魅力の発掘している

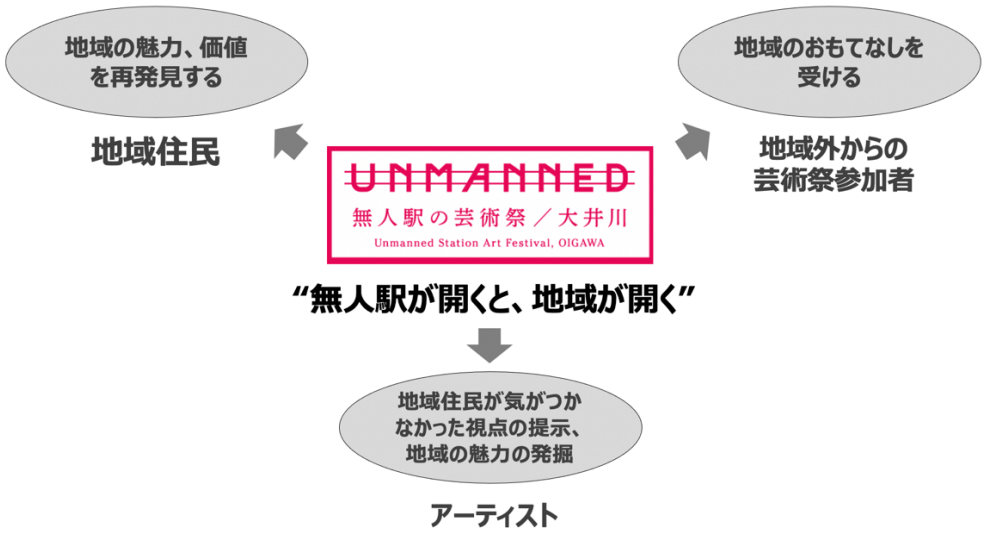
住民が地域を見るためのアートだからこその視点の提示が多くあり、参加アーティストたちが様々なアプローチで地域の魅力を発掘しているということが分かった。アーティストの高い感性と、入念なリサーチ、または地域住民との信頼関係やコミュニケーションを積み重ねることにより作品が生まれており、それが住民に新しい視点を提示している様子が多く見受けられた。主催側からは、「できればさらに一歩踏み込んで、地域のマイナス部分も取り扱うことを期待したい」というコメントが挙げられた。これはアートを活用して地域のネガティヴな側面にもうまく触れることで、地域内の関係性が前向きに発展するのではないかという期待が込められている。

3-2.地域住民が、地域の魅力・価値を再発見する

本芸術祭を通して、地域住民にとって「オラが作品」（地域の風景も住民である自分たちもひっくるめて、作品の一部である）という主体性の意識の高まりが生まれている。アーティストは地域住民を第一に考えて彼らの目線で作品を仕上げており、開催期間中は外からの芸術祭参加者よりも地域の人の鑑賞や利用が多かった作品も少なくなかった。また地域住民たちが自分たちで身にまとうことで完成する作品もあった。このようなアートの仕掛けや観点によって、多くの地域の魅力・価値の再発見につながっていると考えられる。無人駅ではあるが、過疎ではなくそこに確かに人はいるのである。

3-3.地域外からの芸術祭参加者やアーティストが、“地域のおもてなし”を受ける

本芸術祭は、地域住民がいないと成り立たないものである。地域住民からは「この芸術祭をきっかけに足を運んでもらって、そこに暮らす我々のことを知ってもらって、また何かあれば来てもらいたい」と話していた。地域住民や“妖精”たち（芸術祭の運営サポート全般を行う地域の人たち）の魅力を伝える。



1.対象事業

1-1.事業の背景・経緯

今回の評価対象は、「UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川」である。大井川鐵道無人駅周辺 （静岡県島田市・川根本町）を舞台として、地域で忘れられた「無人駅」を舞台に繰り広げる芸術祭である。2017 年度から毎年開催されており、今年は 3 年目である。今回は 12 名のアーティスト（+学生団体 1 組）が参加した。2020 年は、3 月 6 日（金） - 22 日（日）の 17 日間開催して、4,275 名が訪れた。総来場者数について、パブリックスペースであるため、来訪者数の計測が困難である。来場者数のカウントは、各駅及びエリアに作品が分散しており、屋外展示作品もあることから、芸術祭のために訪れた実人数をすべての作品ごとに把握することができないため、下表の備考に示す形で推計した。

年度	日程	総来場数	備考
2017 年度	2018/3/9-3/25	3,840 名	作品キャプションを持ち帰りできるようにし、来場者数測定の一助とした。3 人に 1 人が持ち帰ったと想定すると、のび来訪者数想定 3,840 人＋鉄道利用者及び住人と推測した。
2018 年度	2019/3/8-3/24	1,576 名	総回遊数：9,967 名
2019 年度	2018/3/6-3/22	4,725 名	総回遊数：18,575 名。入場者数を計測可能なインフォメーション センターを基準として設置し、主要 3 駅及びエリアへの来訪者を想定うえで、主要 3 駅及びエリアへの来場者数を合計したものを芸術祭全体の来場者数とした。回遊数は、インフォメーションセンターでの作品を基準とし、来場者が各作品鑑賞を回遊した数を想定したものとした。

2016 年 11 月に静岡県文化プログラムの採択が決まり、その後連続して助成を受けたことにより、活動の幅が厚みを増してきた。主催者によると、「地域の方が、地域の見たことないところを見てほしい」という興味喚起の想いがスタートであったという。大井川鐵道は歴史ある鐵道であり、大井川本線の他に、有名な SL や機関車トーマスも走っている。大井川本線は合計 19 駅があり、うち 15 駅が無人駅である。無人駅に 1 駅あたりに電車が来る回数は 1 日概ね 10 本未満である。一方で、観光客が多く集まる SL や機関車トーマスの停車駅は 4 駅のみであり、多くの観光客は素通りしてしまうのが無人駅の特徴である。普段の観光では決して知られることのない無人駅という場所を、地域内外の人に発見して、体験してもらう。これまで地域づくりを行なってきた NPO であるクロスメディアしまだが、地域づくりの一環として芸術祭の企画・開催に乗り出したことが活動の経緯である。

1-2.事業の特徴

「UNMANNED」の特徴を以下に示す。

1．「無人駅」を舞台にしていること
2．「文化・芸術」を活用することで、「地域のありのまま」を表現すること
3．地域住民とアーティストの「関係性」

1 は、「無人駅」は地域資源であるが、地域の人にとっては当たり前であり、ある意味忘れられたものであるものを芸術の舞台、資源としていることである。大井川鐵道からは「SL やトーマスになくて UNMANNED にあるものは、普段見落とされており光が当たらない無人駅にスポットライトがあたることが魅力である」とのコメントがあった。2 は、パンフレットや SNS などでは伝えられない地域の人の生き方や土地の魅力、地域の課題などを含めた「地域のありのままの姿」を中立的な姿勢で表現することができるのが「文化・芸術」という手法・アプローチの強みである。芸術祭やアートの活用により、地域の魅力を様々に切り取れる。3 は、地域住民が芸術祭の立役者であり、彼らがアーティストに協力することによって「地域のありのままの姿」が作品に映し出される。地域住民がアーティストを支える関係性ができており、地域住民と共創することで作品が成り立つ。地域住民抜きには、「UNMANNED」は成り立たないのである。無人駅の先には地域があり、そこで暮らす人たちの魅力やありのままを伝えるきっかけとしてのアートであり、それを引き

出すアーティストという関係性が特徴である。吉田（2019）[1]の「芸術祭による地域づくりへの影響の整理」によると UNMANNED は、作品の性格＝「サイトスペシフィック型」（その場所の特性を生かした作品展示）×地域の受け入れ態勢＝「既存の拠点連携・発展型」に分類されるだろう。

2019 年度「UNMANNED」の展示作品とアーティスト（パンフレットより）

1-3.事業の実施体制

クロスメディアしまだに加えて、地域のコアスタッフ（県内の NPO 関係者が中心）、地域住民、参加アーティストらによって「UNMANNED 無人駅の芸術祭」が展開されてきた。主催側は NPO だけでやることのリソース面や広報面の限界を感じて、3 年目の今年度は、より持続可能な運営体制の構築を志向して地域のステークホルダーに関わってもらうために「推進会議」形式をとって進めた。以下に実施体制を示す。

1	クロスメディアしまだ	「UNMANNED 無人駅の芸術祭」の企画から運営までの全てを担当。推進委員会の運営を取り仕切る。
2	地域のサポーター・コア・スタッフ・地域住民	本芸術祭の運営に欠かせないのが地域のサポーターの存在である。今年は“妖精たち”と呼ばれる地域の住民が 20 名ほど関わっており、アーティストへの支援や作品制作への協力など、幅広く行なった。この地域サポーターの人数は年々増えている。
3	アーティスト	本芸術祭への参加アーティストであり、今年度は 12 名のアーティスト（＋学生団体 1 組）が参加した。作品の制作過程で地域住民にヒアリングをしたり、材料の運搬や運営を手伝ってもらったりするなど、多くが地域と共に作品を作り上げた。
4	推進委員会	大井川鐵道、行政（島田市）、町内会など、
5	その他	静岡県文化プログラム

[1] 「芸術祭と地域づくり」（吉田隆之、水曜社, 2019）

1-4.事業の実施プロセス

助成決定後から、以下のような流れで企画・準備・本番を行なった（実施計画書より抜粋)。制作期間からアーティストが地域に住み込んで入念なリサーチを行なったり、数ヶ月かけて制作を行ったりするケースもあった。この期間中、ブンプロのプログラム・コーディネーター（PC）が適宜相談に乗って進めた。

電車で巡るおすすめコース

時刻表は予告なくダイヤ改正する場合がございます。大井川鉄道公式HPをご確認ください。

1日ダイジェストコース

「金谷駅」発　9:01 ⇒⇒
9:45 着「塩郷駅」発 11:17 ⇒⇒
11:29 着「抜里駅」発 13:23 ⇒⇒
13:35 着「福用駅」発 15:23 ⇒⇒ 15:47 着「金谷駅」

じっくり巡りコース

「金谷駅」発　9:01 ⇒⇒
9:45 着「塩郷駅」発 13:13 ⇒⇒
13:23 着「抜里駅」～[ガイドツアー参加（※開催日)]～ 発 15:12 ⇒⇒
15:23 着「福用駅」（※鑑賞16時迄）発 17:39 ⇒⇒ 18:02 着「金谷駅」

ゆっくり2駅&温泉コース

「金谷駅」発 11:09 ⇒⇒
11:40 着「抜里駅」発 12:53 ⇒⇒
13:03 着「塩郷駅」～[ガイドツアー参加（※開催日)]～ 発 15:01 ⇒⇒
15:09 着「川根温泉笹間渡」～[入浴]～ 発 17:25 ⇒⇒ 18:02 着「金谷駅」

大井川鉄道の乗車や作品鑑賞をより楽しむための心得

その① 作品鑑賞は無人駅エリア。乗り降りする電車に注意して
無人駅で乗車できるのは普通（ワンマン）電車のみ。SLや急行列車の一部は無人駅に止まりません。

その② 電車の本数が少ないよ! 時刻表を見て効率的に回る工夫を
単線の鉄道のため、1時間に1本のベースでしか電車が来ません。ツアーへの参加や自家用車と電車を組み合わせた回り方など工夫を。

その③ トイレは目についたら必ず済ませるのがポイント
普通電車にはトイレがついていません。無人駅も全ての駅にトイレが設置されているわけではありません。トイレは見かけたらこまめに済ませましょう。

その④ 無人駅での運賃の支払い方法は?
無人駅から乗車する際は、乗車口で「ワンマン整理券」をお取りいただき、下車の際に車両一番前の運賃箱にてご清算ください。

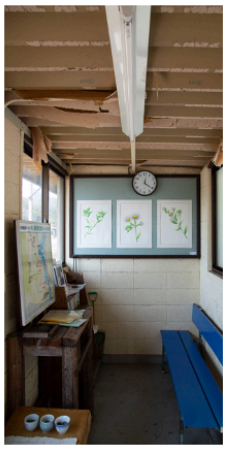
その⑤ 車の場合、駐車場所に配慮しよう
単線の鉄道のため、1時間に1本のベースでしか電車が来ません。ツアーへの参加や自家用車と電車を組み合わせた回り方など工夫を。

その⑥ 挨拶が鑑賞&旅の基本です
地域住民の方や他の来場者とはぜひ挨拶を。気持ちの良い挨拶は旅を何倍も豊かなものにしてくれます。

時期	事業内容	
6月～ 7月	**<全体スケジュール決定及び関係機関との打合せによる実施体制のすり合わせ>**	
	・大井川鐵道との打合せ （実施駅、回遊施策、期間等） ・島田市及び川根本町との打合せ （実施体制等）	・アーティスト選定方法について打合せ ・アーティスト用資料作成 ・アーティストの選定、依頼 （県外アーティスト）
8月～ 9月	**<アーティスト選定及び会場決定>**	
	・ボランティアスタッフ及びサポーターの募集（募集後定期的な会議の開催） ・滞在場所候補の洗い出し ・回遊施策についての打合せ	・アーティスト募集（県内アーティスト） ・回遊ツアー開催（アーティスト向け） ・フィールド選定（大井川鐵道交渉・調整）
10 月・ 11月	**<開催告知関係及び回遊性の仕組み作り>**	
	・作品プラン決定及び作品制作 （各アーティスト毎） ・周辺住民への関わりの呼びかけ及び プラン説明 ・関係機関への協力依頼	・協賛、協力依頼 ・回遊施策等（交通機関等）の依頼 ・告知パンフレット製作及び掲出 ・公式サイト制作・公式 facebook ページ、 公式インスタグラム制作
12月 ～ 2月	**<プレスリリース及び作品制作>**	
	・ワークショップ内容決定 ・プレスリリース（計2回）	・アーティスト滞在場所の借上げ開始 （12月～） ・回遊施策（交通機関、モデルコース等）の決定 ・回遊施策（モデルコース）プレツアーの実施
3月	**<イベント開催>** ・作品管理 ・アートワークショップの開催 ・アートツアー等の開催 ・取材対応 ・記録集様素材撮影	**<撤収>** ・作品撤収 ・会場撤収 ・報告資料作成 ・記録集の制作

1-5.芸術祭の内容　～巡り方～

以下のようなコースで、鑑賞者が UNMANNED に参加できる。尚、閲覧料については、以前は有料パスポートを発行していたが、パブリックスペースを利用するという特性を考慮して今年度は無料である。これまでの開催経験を踏まえて、地域の芸術祭に参加するときのマナーや楽しむための心得も紹介している。



2.事業評価

2-1.評価結果の活用イメージ

クロスメディアしまだと相談の結果、「UNMANNED」運営上の課題は「重要なステークホルダー（特に行政、大井川鐵道）の巻き込み」と「持続可能な運営の仕組み（事業モデル）の構築」という 2 点に集約された。今回の事業評価で「UNMANNED」の本質的な価値を整理することで、今後以下の課題への活用に役立てていただくことを見据えて評価を行なった。

・重要なステークホルダー（行政、大井川鐵道等）に、活動の価値・意義を理解してもらう
・持続可能な運営の仕組み（事業モデル）を考える素材とする

2-2.評価目的

クロスメディアしまだと評価者で本事業評価に取り組む目的を整理した。その結果、「UNMANNED 無人駅の芸術祭」が「誰に対してどんな価値を生み出しているか」を明らかにすること、その成果を定義・測定して、今後の持続的な展開につなげていくために関係者にどのようなメッセージを伝えればよいかが整理されることが有用であるということになった。以上を踏まえて、評価目的を以下のように設定した。

UNMANNED の価値を整理して、持続的な展開の可能性を模索すること

2-3.評価設問　～評価で知りたいこと～

また、2-2 で設定した評価目的を達成するために、どのような問いに答えれば良いのだろうか。以下の３つの評価設問を作成した。

1. UNMANNED に対して、それぞれのステークホルダーが感じている価値はどのようなものか？
2. UNMANNED によって、どのくらい"地域が開かれる"ようになったと言えるのか？
3. UNMANNED の価値を持続的に生み出すために、どのような運営体制を作ることが効果的か？

尚、静岡県文化プログラムの評価基準のうち、UNMANNED と親和性のあると思われるものは、以下の通りである。本事業評価において上記の評価設問に答えることにより、これらへの貢献も見ていく。

評価基準	内容	理由
1	多様性と包摂生	当該事業が、アーティストと地域住民、来訪者、サポーター等、多様な人の化学反応を起こすことを目指し進められているため。
3c	企画運営面での自立発展性	今年から推進委員会形式の運営体制構築に取り組んでおり、企画運営面での自立発展性を高めることを意図しているため。
4	地域資源の発掘・社会課題への対応	UNMANNED は「無人駅が開くと地域が開く」といっており、この「地域が開く」度合いを見られるようになりたい、と団体側から要望あり。

2-4.評価実施体制

本事業評価は、以下の体制で実施した。また本芸術祭を題材に研究を行っている佐野直哉氏（ブンプロ PC）より、本芸術祭に関するデータを提供いただいた。

事業評価担当者	千葉 直紀（一般財団法人 CSO ネットワーク　評価事業コーディネーター）

地域住民参加型の「顔の家」の制作の様子

「顔の家」の展示の様子

2-5.評価の実施スケジュール

本事業評価は、以下のスケジュールで実施した。

日程	内容
10/28	キックオフ mtg（クロスメディアしまだ、ブンプロ立石氏 mtg） - 評価目的・活用イメージ設定、情報収集計画づくり
11 月	アーティストへのヒアリング（オンライン、2 名）
12/12	地域の人たちへのヒアリング（対面、2-3 名） コアサポーターへのヒアリング（対面、3-4 名）
12 月中旬- 1 月上旬	中間レビュー（クロスメディアしまだ、ブンプロ立石氏 mtg） - ヒアリング結果を踏まえて、評価設問と評価グリッド作成
1 月	行政、大井川鐵道、その他関係者へのインタビュー
1 月	データ収集（アーティスト制作現場同行、地域の人へのインタビューを含む）
1 月下旬 - 2 月上旬	芸術祭のアンケート項目提案 評価結果の活用の相談（クロスメディアしまだ、ブンプロ立石氏 mtg）
3 月上旬- 3 月中旬	無人駅芸術祭開催、データ取得
3 月下旬	終了時 mtg、データの解釈（クロスメディアしまだ、ブンプロ立石氏 mtg）、 評価報告書作成

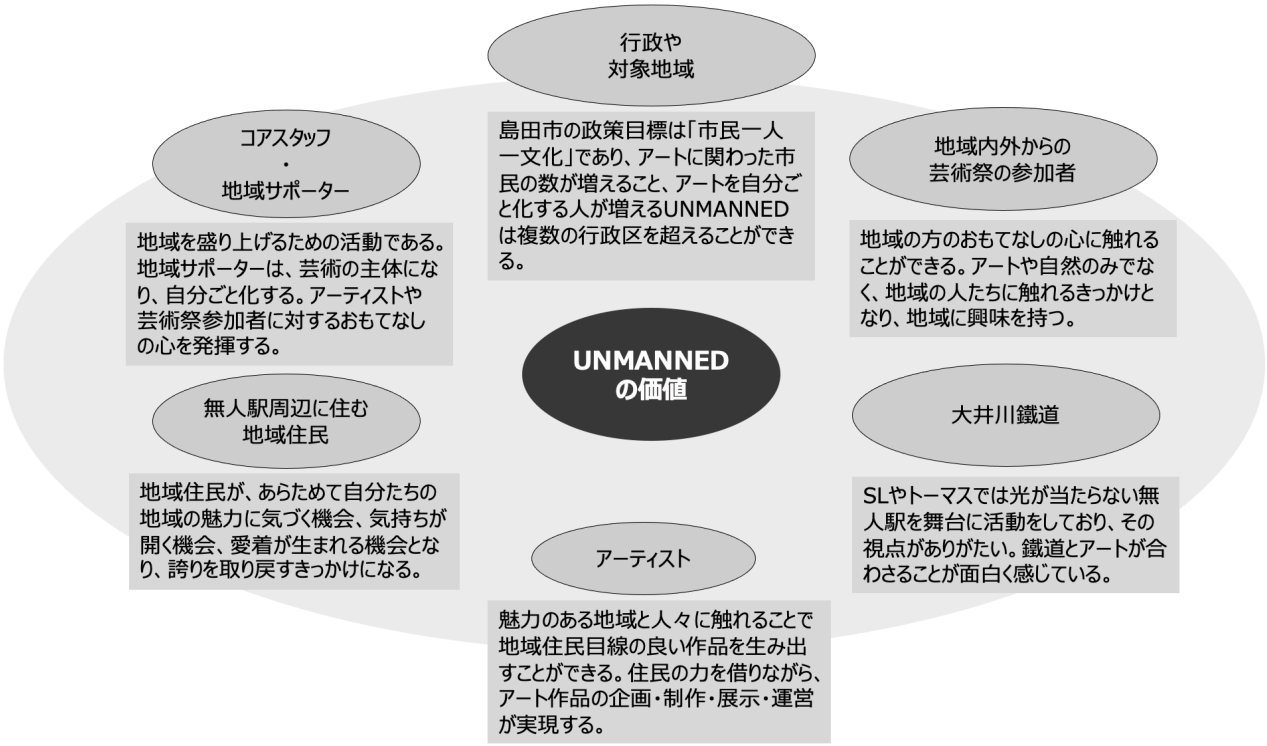
2-6.評価結果

以下に、関係者へのヒアリング・ディスカッションによって明らかになった「UNMANNED の価値の整理」と「UNMANNED の成功の姿」、その価値を生み出す「セオリー・オブ・チェンジ」、「評価グリッド」、「アウトカムを測定するためのルーブリックとアウトカムの達成度」をそれぞれ示す。

2-6.1.UNMANNED の価値の整理

（1）ステークホルダーにとっての価値

評価設問 1 に関して、UNMANNED のコア・スタッフや地域住民とのグループディスカッションや行政（島田市）と大井川鐵道へのヒアリングを通じて、以下のような価値が見えてきた。価値の整理を下図に示す。地域外からの芸術祭参加者だけでなく、地域住民や運営に関わるボランティア、アーティスト、大井川鐵道、そして行政まで、広く価値を与えていることが示唆された。UNMANNED は、“無人駅が開くと、地域が開く”をキー・メッセージにしているが、これは“無人駅の芸術祭を通して地域住民の心や視点が開いていくことで、地域内外の関係性を豊かにしていく”ことにつながるものである。本芸術祭を媒介にして、地域住民、アーティスト、地域外の人（芸術祭参加者）、行政や大井川鐵道など、普段交わらない地域内外の関係者たちが交流することができる“地域が混ざり合う”機会なのである。



「2-1.評価結果の活用イメージ」に、重要なステークホルダー（行政、大井川鐵道等）に、活動の価値・意義を理解してもらう、ということを掲げていることもあり、大井川鐵道と島田市へのヒアリング結果の概要を紹介する。

■大井川鐵道　企画運営事業部　課長　伊藤さま、次長・施設課長　滝山さま
・UNMANNED の魅力は、無人駅ということの着眼点、そして鐵道とアートが合わさることが面白い。
・SL やトーマスになくて UNMANNED にあるものは、普段見落とされており光が当たらない無人駅にスポットライトがあたることが魅力である。

■島田市　社会教育課長　南條さま、新間さま
・UNMANNED の市内の他の活動と比べた特徴は、この土地ならではの特徴や魅力について、市民が気づかないところをアーティストの視点から形づくることである。地域の人が、地域の魅力に気がつくための事業であり、地元に対する誇りを取り戻すことができると考えている。
・島田市としては、市民の素晴らしい声を拾って、発信していきたい。市民が気づくことが増えたら良いと思う。さとうりささんの作品の里親希望が、今年は８軒と増えていることも、その意味では成果だと思う。
・市民もアートに関われるようになること、アートを自分ごと化してくれること、UNMANNED の活動は究極のアウトリーチ活動であると思う。島田市の政策目標は「市民一人一文化」なので、関わった市民の数が増えること、頭数を増やすことが重要。アートの恩恵をこうむる人数を増やしていきたい。

「福用レインボーハット」の展示の様子

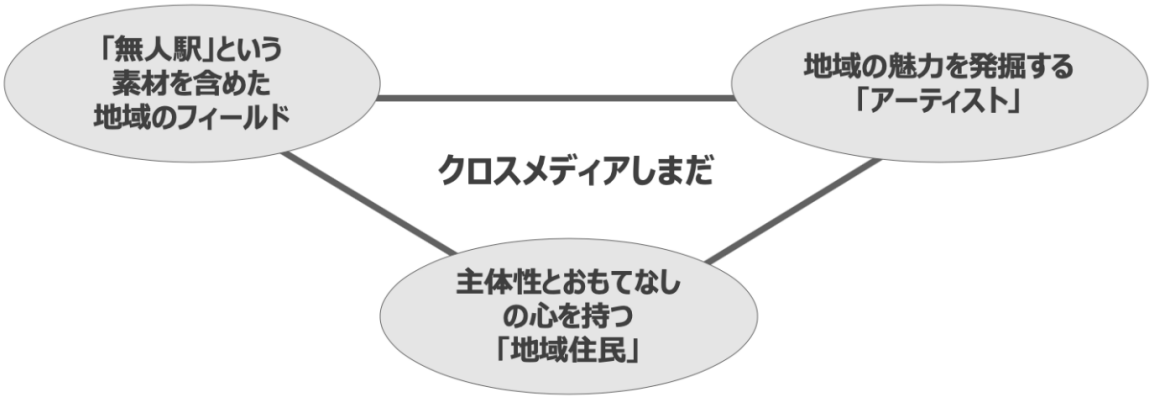
「黒いオッパイ」の展示の様子

（２）価値を生み出す源泉

評価設問３にも関連して、（１）のような多様な価値を生み出す源泉についても、グループディスカッションをもとに整理した。「無人駅」という素材を含めた地域のフィールドと、地域の魅力を発掘する「アーティスト」という外部者の存在、そしてそれを成立させているのが主体性とおもてなしの心を持つ「地域住民」という大きく３つの要素があり、クロスメディアしまだが、これらをつなぐことで価値が生まれている。

UNMANNED の活動プロセスの中で、まずアーティストが「無人駅」という素材やそれがある地域のフィールドに惹かれていた。アーティストが地域に入り込んでリサーチを行い様々な地域との関わりの中で魅力を切り取っていく。アーティストへのヒアリング結果によると、参加経験が長いア

ーティストの方が、地域との関係性ができていたり、リサーチによって十分な情報を得ていたりしており、より地域目線で作品を提案できたという実感値があったようである。主催側が、そのプロセスの中に、地域住民の関わり方の補助線を用意することによって、地域住民が「芸術祭を自分ごと化」していくこと、それがアーティストの作品に大いに影響を与えていたり、活動の継続性が高まっていたりする様子が明らかになった。地域住民がアートという壁を意識しないうちにその境界を行き来することにより、地域にとって良い作品が生まれている様子であった。



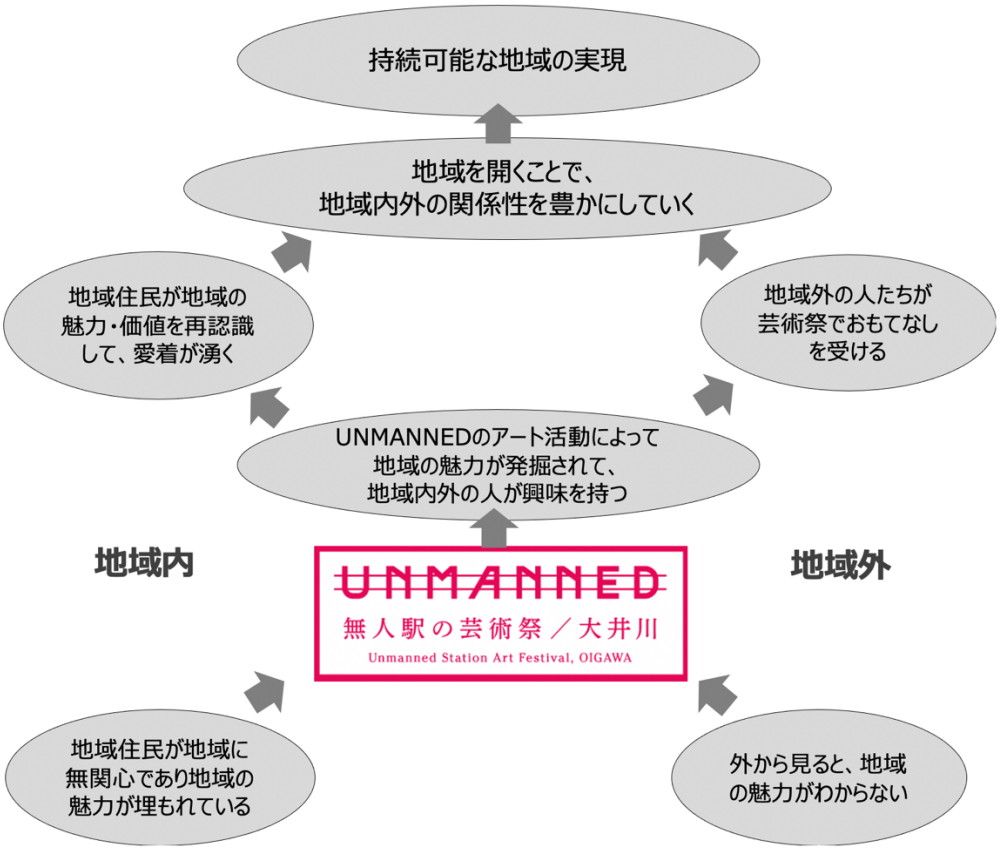
2-6.2.UNMANNED の成功の姿

関係者のグループ・ディスカッションを通して、UNMANNED の“成功の姿”を探った。これを知ることで、評価で得るべきデータを明らかにするためである。“成功の姿”は「持続可能な地域の実現」であり、そのために地域住民の心や視点が開いていくことで、地域内外の関係性を豊かにしていくということが必要である。具体的には、地域の人たちが知らず知らずのうちにアートについて議論したりと、自分とアートが近くなっていたりすることである。はじめに、このような地域内の変化が起こることで地域内の関係性が豊かになり、それが芸術祭を通じて外に波及する。それを説明したのが、次の図表の①～④である。これは、UNMANNED のキー・メッセージである“無人駅が開くと、地域が開く”ということである。

地域内	地域住民が、自分たちの地域の魅力に気づくこと（地域の魅力の再発見・再認識） 地域住民が、芸術祭を通して、おもてなしの心で外の人間（アーティストや芸術祭参加者など）とコミュニケーションを取れるようになること
▼	
地域外	アーティストが、地域で安心して制作活動に取り組めること 芸術祭参加者が、地域の魅力を見つけられること

2-6.3 セオリー・オブ・チェンジ

UNMANNED の活動によって、どのように“持続可能な地域を実現”するのだろうか。コアスタッフでのグループディスカッションを踏まえて、セオリー・オブ・チェンジ2の整理を行なった。結果を図表 XX に示す。無人駅の地域は、表面的には人が少なく衰退している、いわゆる“お荷物エリア”のように見られがちであるが、実際はそうではないと地域住民が再認識することが持続可能な地域の実現に向けての一歩目である。図表 XX に示したように、地元の人たちが地域の魅力に気づき、価値を再認識して誇りを取り戻すこと、それが芸術祭を通して外の人に波及するのである。地域で意識が変わった人たちが芸術祭などでおもてなしの心を発揮して観光案内人になる。その変化のトリガー・媒介役となるのが、地域で感じたことを表現できるアーティストであり、彼らの作品なのである。



2-6.4.評価グリッド　～価値を測定するための計画表～

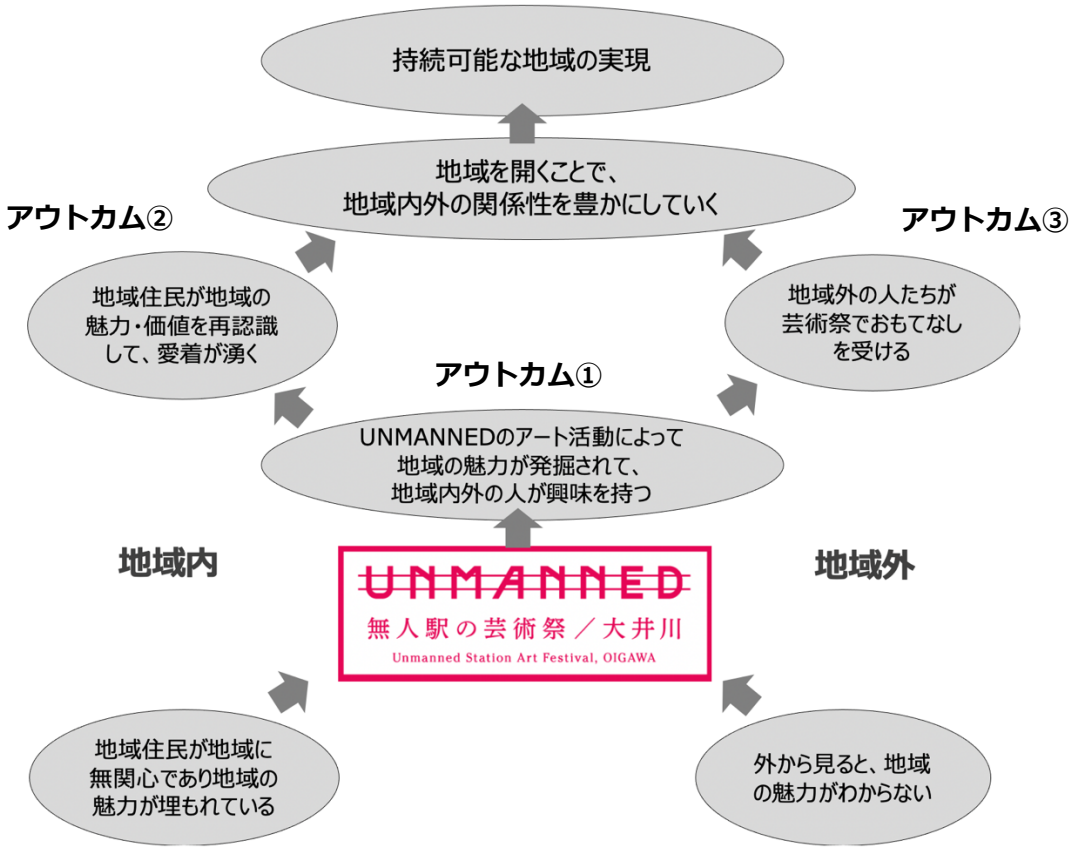
UNMANNED の価値を測定るための計画を示した評価グリッドを下表に示す。そのうち「価値」の部分は 2-6.1 で整理をした通りである。「アウトカム」の①～③はセオリー・オブ・チェンジに対応している。「アウトカム」の④は、文プロの別調査で実施した。

[2] 事業設計を整理する際に使う手法の一つであり、一般的により包括的に、課題が解決された望ましい状態を実現するための複数の手段を図示したもの。複数の事業から構成したり、解決に正負の影響を及ぼす条件も含めて図示する場合もある。セオリー・オブ・チェンジは定型の図式がなく、ロジック・モデルよりもより自由な形で様々な図式案が提案されている。

評価設問		評価基準 ／必要なデータ	情報収集手段	スケジュール
大項目	小項目			
【価値】 UNMANNEDの活動に対して、それぞれの関係者（アーティスト、地域住民等）が感じている価値は何か？	地域住民が感じている価値	ステークホルダーが感じている価値について把握する	コアスタッフのグループディスカッション	１２月
	アーティストが感じている価値		コアスタッフのグループディスカッション	１２月
	行政（島田市）にとっての価値		島田市へのヒアリング	第2回推進委員会
	大井川鐵道にとっての価値		大井川鐵道へのヒアリング	第2回推進委員会
	その他のステークホルダーとっての価値		コアスタッフのグループディスカッション	１２月
【アウトカム】 UNMANNEDによって、どのくらい地域が開／拓かれるようになったと言えるのか？	①アーティストが、どのくらい地域の魅力を発掘できたか？	アーティストが発掘した地域の魅力の深さと量に関するデータ	アーティスト、地域住民へのヒアリング	3月
	②地域住民が、どのくらい自分たちの地域の 魅力に気がついたか？ （内面的な意識の変容）	地域住民の内面的な意識の変容とその人数に関するデータ	アーティスト、地域住民へのヒアリング	3月
	③地域住民が、どのくらいおもてなしの心を持って、外部者とコミュニケーションが取れるようになったか？（外在的な行動の変化）	地域住民の外在的な行動の変容とその人数に関するデータ	アーティスト、地域住民へのヒアリング	3月
	④芸術祭参加者が、どのくらい地域の魅力を感じることができたか？	参加者が感じた地域の魅力に関するデータ	芸術祭参加者へのアンケート	3月
UNMANNEDの効果を持続的に生み出すために、どのような運営体制を作ることが効果的か？	(A)効果を生み出すための体制はどのようなものか？	効果を生み出すための体制面について整理する	コアスタッフや推進委員会での議論の整理	3月
	(B)効果を生み出すためのプロセスはどのようなものか？	効果を生み出すためのプロセスについて整理する	コアスタッフや推進委員会での議論の整理	3月
	(C)企画運営面での自立発展性はどのくらいあるか？	効果を生み出すための自立発展性について整理する	コアスタッフや推進委員会での議論の整理	3月

2-6.5.ルーブリックと価値判断　～アウトカム評価を行う～

UNMANNED によって生まれたアウトカムと評価基準をクロスメディアしまだと評価者で相談の上、定義して、ヒアリング等によって情報収集を行い把握した。アウトカムの達成度を測るために、独自に 4 段階のルーブリックを作成して、これを活用して価値判断を行った。ルーブリックはこれまでの議論を通して評価者が作成を行い、クロスメディアしまだの大石氏、兒玉氏に自己評価を行ってもらった。



評価設問	調査対象・方法
①アーティストが、どのくらい地域の魅力を発掘できたか？	・アーティストへのヒアリング ・地域住民（運営側）への ヒアリング
②地域住民が、どのくらい自分たちの地域の魅力に気がついたか？ また、その人数は？	・アーティストへのヒアリング ・地域住民（運営側）への ヒアリング
③地域住民が、どのくらいおもてなしの心を持って、外部者（芸術祭参加者・アーティスト）とコミュニケーションが取れるようになったか？ また、その人数は？	・アーティストへのヒアリング ・地域住民（運営側）への ヒアリング

アウトカム①について

▶評価設問：アーティストが、どのくらい地域の魅力を発掘できたか？

▶評価基準：地域の魅力の発掘の度合いと広がり

▶評価結果（ルーブリック）：

深度

1	2	3	4
地域住民が感じる地域の魅力は変わっていない 【魅力の発掘度：無】	地域住民が気がつかなかった視点を提示して、魅力を少し発掘した 【魅力の発掘度：小】	地域住民が気がつかなかった視点を提示して、魅力をある程度発掘した 【魅力の発掘度：中】	地域住民が気がつかなかった視点を提示して、魅力を十分に発掘した 【魅力の発掘度：大】

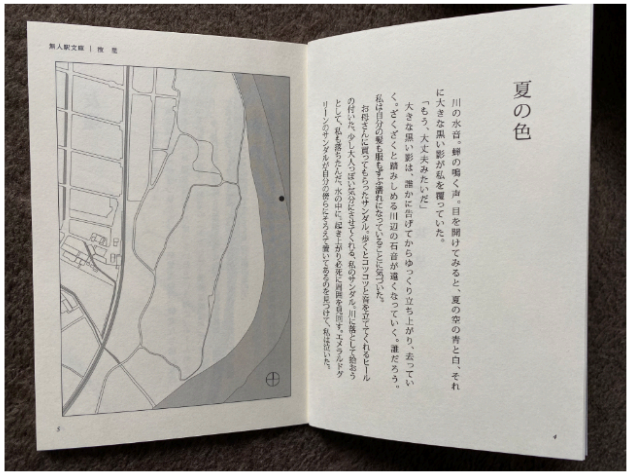
広がり

1	2	3	4
アーティストが発掘した地域の魅力はない。 【発掘した魅力の広がり：無】	アーティストが発掘した地域の魅力は少ない。 【発掘した魅力の広がり：少】	アーティストが発掘した地域の魅力は中程度である。 【発掘した魅力の広がり：中】	アーティストが発掘した地域の魅力は多い。 【発掘した魅力の広がり：多】

主催側と協議の結果、アーティストによる地域の魅力の発掘の度合い（深さ）は「3（中程度)」、その広がりは「4（多い)」とした。発掘の度合いを「3」としたのは、この３年間で参加アーティストが様々なアプローチで地域の魅力を発掘していることである。中には思いもよらぬ方法で地域住民に焦点を当てたり、作品を共創することで、地域の魅力を引き出した。「4」にしなかった理由は、できればさらに一歩踏み込んで地域のネガティヴな側面にも踏み込むことを期待したいからという。これは芸術という手法を用いるアーティストという外部者で高い感性を持つ者だからこそできることであり、地域のネガティヴな側面にうまく触れることで地域内の関係性が前向きに発展するのではないかという期待が込められている。魅力の広がりを「4」としたのは、この３年間の開催で、アーティストのプランが年を重ねるにつれて地域住民に寄ってきたという認識を主催側が持っているためである。制作活動の中で「アーティストありき」で作品を創るではなく、「地域ありき」で作品を創るという風に地域の潜在的な文化資源の掘り起こしが、多く行われている。

例を挙げると、北川 貴好氏の作品「茶屋せんべや」は、地域の誰もが知っていた「せんべや」と呼ばれる元工場について、住民のインタビューを行い人々の記憶を紡ぎ出す映像を制作した。「せんべや」の上映には、取材をされたおばあちゃんが地域のおばあちゃんを連れてくる光景が見られたという。木村 健世氏の「無人駅文庫」は、地域の人たちを丹念に取材して無人駅に関する物語を集めて文庫にしている。取材を進める中で、取材対象のおばあさんの話を聞いて遠方（四国）に暮らす息子さんにも会いに行ったという。「無人駅文庫」で取材をされた住民たちは嬉しそうに木村氏に取材をされたことを語っており、たくさん地域の人に自分の物語が掲載された文庫本を配ったという。木村氏は「これを制作するために、１週間くらい連続で地域に泊まり込んで、事前のアポイントを取らずに突撃インタビューを繰り返す」という。事前のアポイントをとらないのは、地域住民の素の姿に触れて自然に記憶を引き出すためだという。インタビュー相手が、次の住民を紹介してくれることもあるそうだ。これらの事例を見るだけでも、地域の魅力がアーティストによって発掘されて、それが地域内で波及していることがわかるだろう。

「無人駅文庫」



「せんべや」の一コマ。地域住民が巨人になって登場する 「せんべや」の会場は、
「せんべや」と呼ばれる地域の工場跡である

アウトカム②について

▶評価設問：地域住民が、どのくらい自分たちの地域の魅力に気がついたか？　また、その人数はどのくらいか？

▶評価の基準：地域住民の内面的な意識の変容度合い、地域で文化・芸術に関わった人数

▶評価結果（ルーブリック）：

変容

1	2	3	4
地域住民の地域の見方は全く変わっていない 【内面的な意識の変容：無】	地域住民の地域の見方が少し変わり、地域の魅力、価値を再認識した 【内面的な意識の変容：小】	地域住民の地域の見方が変わり、地域の魅力、価値を再認識した 【内面的な意識の変容：中】	地域住民が思いも寄らない地域の魅力、価値に気がついた（再発見した） 【内面的な意識の変容：大】

規模

1	2	3	4
文化・芸術に関わった人数は、地域全体に対して少ない。	文化・芸術に関わった人数は地域全体に対してやや少ない。	文化・芸術に関わった人数は、地域全体に対してやや多い。	文化・芸術に関わった人数は、地域全体に対して多い。

地域住民が地域の魅力を再発見することは、本事業の目的のひとつである。主催者と協議の結果、地域住民の内的な変容の度合いは「4（大きい）」、その人数は「3（やや多い）」とした。UNMMANED3年間の開催の積み重ねを通して、地域住民からは、「オラが作品」（自分の作品、地域の作品）という意識の高まりを感じるという。主催側によると、特に地域の中でターゲットとしたい住民は、“妖精”と呼ばれる芸術祭の運営サポート全般を行う地域の人たちたちである。例えば抜里という人口約500名の地域において、今年はおよそ20名が運営に参加したそうである。彼らの意識や価値観の変化は大きく、“妖精”たちが自らのアート論を語るようになる例も多くあったという。3年目の“妖精”20名は地域の全人口に対しても影響力のある人数であり、さらに彼らの口コミにより影響を受ける人たち（家族やご近所など）も多いそうである。“妖精”たちの人数は口コミなどで年々増えており、さらに地域の中には“妖精”の予備軍も多くいるという。UNMMANEDを始める前は、文化・芸術に関わりを持たなかった地域の人たちが、今や制作活動や創作活動に普通にかかわっている。さらに“妖精”のような人たちが出てくるエリアも増えたという。

今年の作品の中には、地域住民がいないと成り立たないものが多かったことも、この内面的な意識の変容につながったようである。例えば、江頭 誠氏の作品「間にあるもの」は、地域住民に着せることで作品として完成するものであった。アーティストとの関わりの中で、自分たち自身が作品になるという意識の芽生えがあり、それが魅力に気がつくことにつながった。推進委員である町内会長の原木氏からは、「アーティトという人たちの存在自体が希望だね。自分のやりたいことを突き詰めて良いという人たち、そういう人たちが進んでよいという場を作っている、それが自分たちに対する再認識につながる」というコメントが寄せられた。
またヒデミニシダ氏の作品「境界のあそび場／うかぶ縁側」は、ニシダ氏が2017年に本芸術祭に関わった際に地域の歴史などを徹底的にリサーチしたことから着想を得たという。大海原に浮かぶ縁側のイメージが湧いて、地元の人を舞台に上げたいという思いがあったそうである。この「浮かぶ縁側」の制作過程には材料の運び込みなどに地域住民たちが関わるなど、彼らなしでは作品制作ができなかったという。また出来上がった際には地域住民たちが毎日ここに登り、普段見ている風景の変化を楽しんでいたそうである。主催者によると、外部の芸術祭参加者よりも地域の人の利用が多かったという。補足であるが、主催者によると、ニシダ氏の作品は地元からの強い要望により、次年度に向けた保存を決めた。

「間にあるもの」の展示風景

「間のあるもの」は地域住民が着ることで成り立つ

「浮かぶ縁側」　　“妖精”たちが「浮かぶ縁側」でくつろぐ一コマ

アウトカム③について

▶評価設問：地域住民が、どのくらいおもてなしの心を持って、外部者（芸術祭参加者・アーティスト）とコミュニケーションが取れるようになったか？　また、その人数はどのくらいか？

▶評価の基準：地域住民からのおもてなしを感じた外部者（芸術祭参加者・アーティスト）の割合

▶評価結果（ルーブリック）：

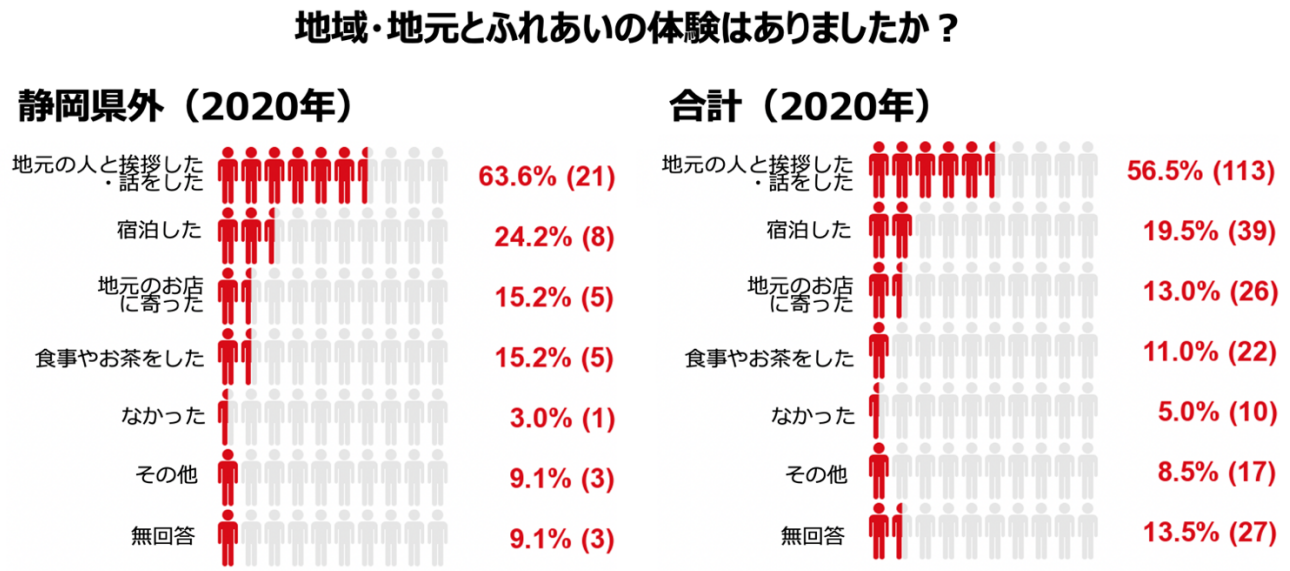
	1	2	3	4
芸術祭参加者	地域住民からのおもてなしを受けた芸術祭参加者はいない	地域住民からのおもてなしを受けた芸術祭参加者はある程度いた	地域住民からのおもてなしを受けた芸術祭参加者は多くいた	地域住民からのおもてなしを受けた芸術祭参加者は非常に多くいた

	1	2	3	4
アーティスト	地域住民からのおもてなしを受けたアーティストはいない	地域住民からのおもてなしを受けたアーティストはある程度いた	地域住民からのおもてなしを受けたアーティストは多くいた	地域住民からのおもてなしを受けたアーティストは非常に多くいた

地域住民がおもてなしの心を持って外部者とコミュニケーションが取れるようになった程度は、芸術祭参加者とアーティスト経由でエピソードを収集して価値判断を行なった。今回は調査の制約上、芸術祭参加者の声はアンケートで集めるのみとなったが、主催者からの情報提供を踏まえて協議の結果、芸術祭参加者が感じたおもてなしの程度は「3（多い）」、アーティストが感じたおもてなしの程度は「4（非常に多い）」とした。対芸術祭参加者について、主催者からの報告によると、地域住民の中には芸術祭参加者に対してお茶をもてなしたり、無人駅にお客さんが電車で到着すると旗を持って出迎えたり、進んで自分の敷地の駐車場を貸し出す住民が現れたり、地域住民が芸術祭とは関係のないお地蔵さんを勝手に設置したり、本数の少ない電車での移動が不便だからといって率先して車で送迎する住民まで現れたという。前述のニシダ氏の「浮かぶ縁側」では、地域住民たちが自身でお茶をふるまうサービスを自主的にはじめてくれており、「こんなにたくさんの人が見に来てくれるのだから、もっとお客さんとふれあいたい、おもてなししたい」という気持ちからだったようである。主催側からは、「この（自主的にお茶を振る舞う）動きが妖精たちの心の変化の最たるものだと感じた」というコメントが挙げられた。地域住民によるおもてなしの方法は様々であるが、芸術祭開催期間はこのような動きが多く見られるなど、地域の芸術熱の高まりがあったそうだ。以下に

示す参加者アンケート結果では、「地域・地元とふれあいの体験はありましたか？」という設問に対して、半数以上の参加者が「地元の人と挨拶した・話をした」と回答している。他の芸術祭とのデータの比較はできないが、高い割合であると思われる。そしてこれは静岡県外からの参加者の割合が高く、来訪者のうち 24.2%が宿泊をしていることがわかる。
対アーティストについて、地域住民の方がアーティストに「何かあったらいつでも言ってくれ」と声をかけていたそうで、そのような姿勢がアーティストにとっても心強かったであろう。アーティストについては、「地域住民の協力なしでは作品制作や作品の着想を得ることすら出来なかった」と語るアーティストが多くおり、評価者が参加アーティスト全員の話を聞けてはいないが、地域住民からのおもてなしの心を感じたアーティストは大多数を占めたことは容易に想像ができる。

参加アーティストの栗原 亜也子氏は「アーティスト側が準備しきれなかったところを、村人がフォローしてくれた。一方的に与えるのではなくて、住民が裏方として楽しんでくれる」と作品制作過程の感想を話していた。主催者は、このようなことができる土壌がこの 3 年間の UNMANNED で出来上がったという。自治会長の原木氏は、「外からの参加者、ここに来たときの気持ち良さ、無償の愛を受けることを感じたと思う」と感想を話していた。さとうりさ氏は 3 年連続の参加だが、年数を重ねるたびに地域住民との関係性が深まった実感があったそうである。島田市からは「さとうりさ氏の作品の里親希望が 6 名と増えていることも、市民が文化・芸術に関わる上での成果だと思う。市民がアートを自分ごと化してくれること、UNMANNED の活動は究極のアウトリーチ活動であると思う」と話していた。



「浮かぶ縁側」で　お茶を振る舞う地域住民たち

「かみさまたちのまちじかん」の一コマ

無人駅の抜里駅で、地域住民が自主的に運営している休憩所

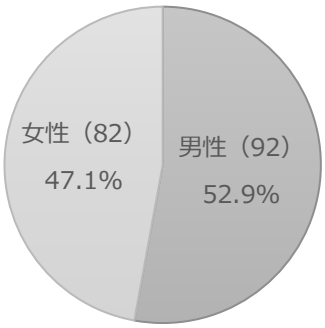
「地蔵まえ 3 サトゴシガン」の展示の様子

2-6.6.UNMANNED の参加者情報

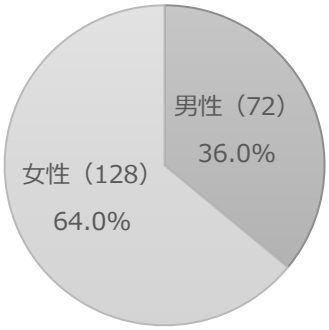
2019 年-2020 年の 2 年間にブンプロ PC の佐野氏がクロスメディアしまだの協力を得て、UNMANNED 参加者情報の調査を行った。以下に、UNMANNED の参加者情報として、性別、居住地、誰と来訪したか、期待値の達成度を示す。参加者の性別は、2020 年は女性が増加して一般的な芸術祭の割合に近づいている。居住地は、大井川近辺及び島田市内からの割合が 26.5%から 34%に増加しており、県内を併せると 78.2% から 81%に増加している。また家族との訪問が増加している。満足度は両年共に高く、特に 20 年は「期待とは違った」の回答が大きく減っていることがわかる。

参加者の性別の年比較

2019 年

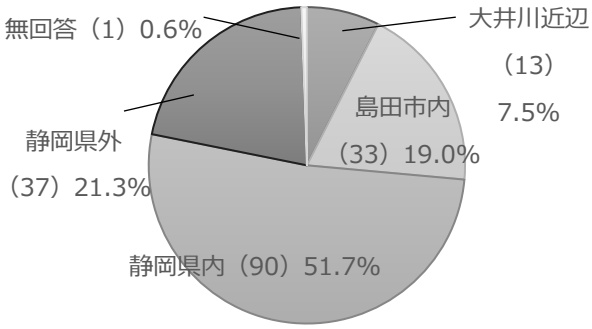


2020 年

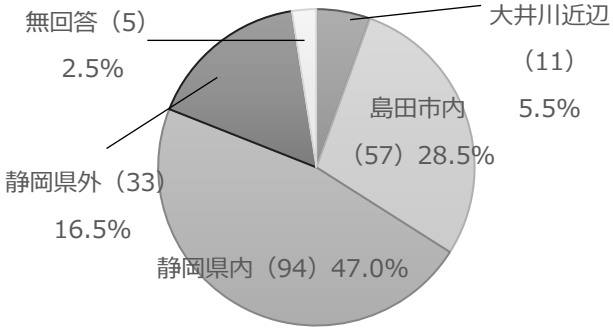


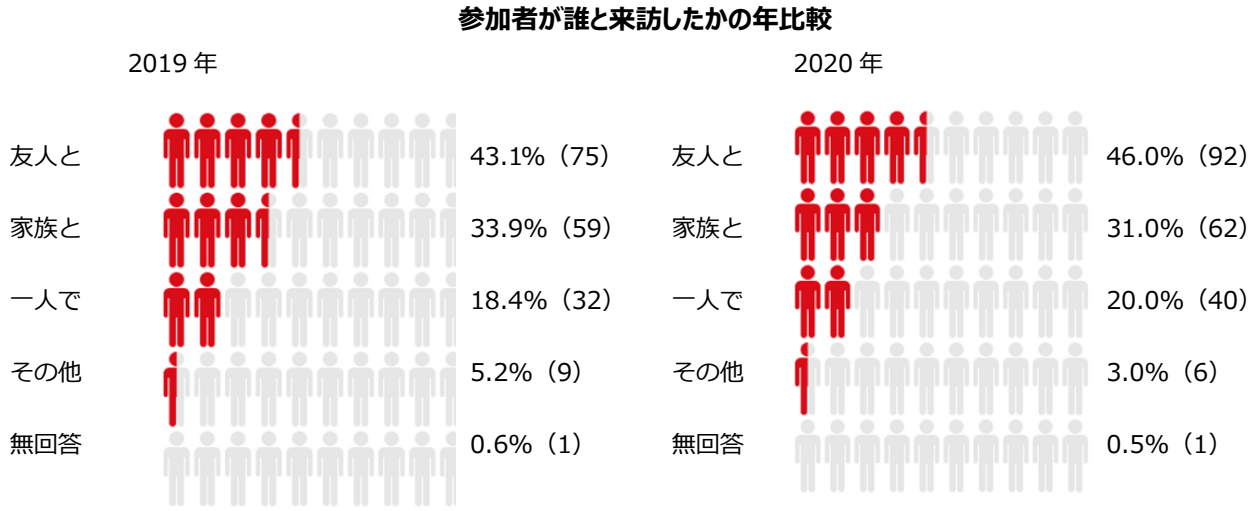
参加者の居住地の年比較

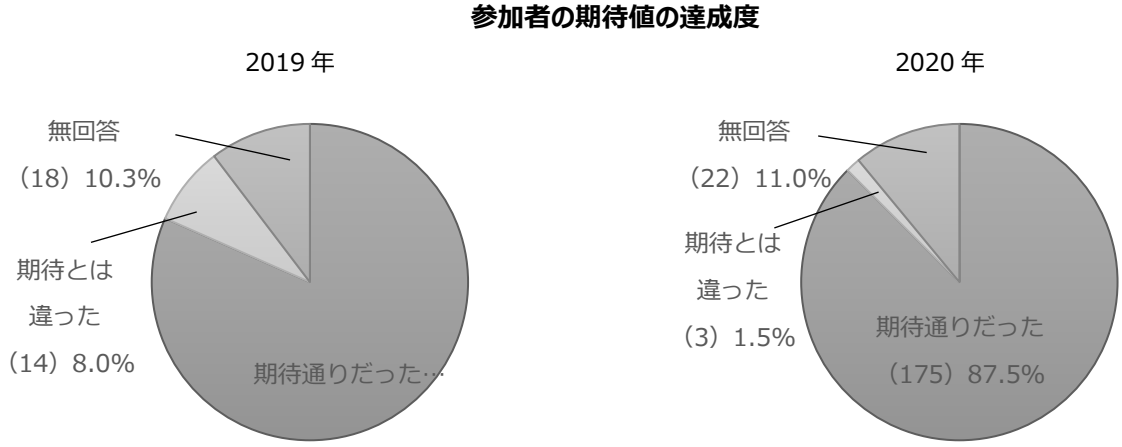
2019 年



2020 年







2-6.7.UNMANNED の参加者アンケート分析

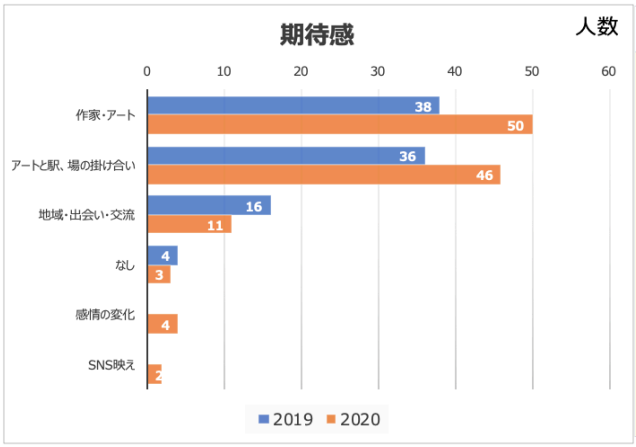
以下に、2019 年-2020 年の 2 年間に実施したアンケート結果の分析を示す。「事前の期待感」、「無人駅の先のワンダーランドとは何か」、「次年度の改善点」の 3 項目について、それぞれ結果を示す。アンケート分析は、それぞれフリーアンサーを KJ 法[3]で分類したものと、テキストマイニングによる分析を合わせて示す。テキストマイニングは、WEB ソフトの「ユーザーローカル」[4]を使用して実施した。（データおよび分析結果提供：ブンプロ PC 佐野氏）

（1）事前の期待感

テキストマイニング分析結果を基に全てのコメントを KJ 法で整理した。その結果、「アートと駅、場の掛け合い」、「作家・アート」に対する期待が高く、両年共に傾向に顕著な変化はないが、テキストマイニング 2019/2020 よく出る単語を比較すると 2019 年は駅周辺の興味に留まっていたが、2020 年は「自然」「風景」「景色」など広がりが見られた。

3 文化人類学者の川喜田二郎（東京工業大学名誉教授）がデータをまとめるために考案した手法である。
4 https://textmining.userlocal.jp/

KJ 法による整理と結果



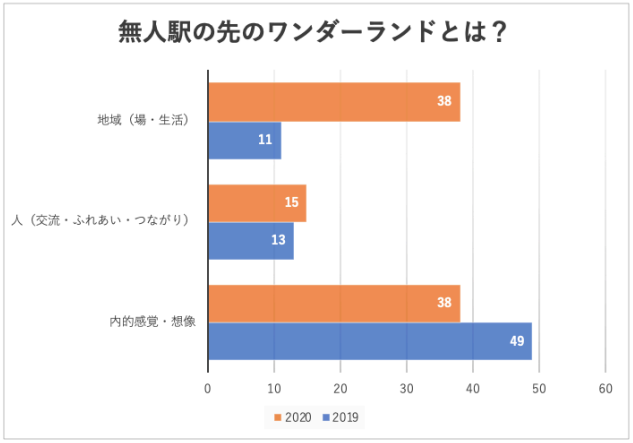
テキストマイニング分析結果

2020にだけ出現	2020によく出る	両方によく出る	2019によく出る	2019にだけ出現
できる めぐる 面白い 白い 縁側 いく おどろく くれる とれる のる ひなびる ふれる みれる 伺う 出す 出会える 回る 広める 感じる 映える 楽しむ 気づく 知る 考える 聞く 行く おおい 丸い 楽しい 素晴らしい	触れる 自然 風景 融合 コラボ 景色 田舎 変化	新しい 作品 アート 思う いい 出逢う 楽しめる 駅 根ざす 鉄道 地域 芸術 江頭	無人駅 展示 期待 アーティスト 異味 交流	たのしい ほしい 古い 珍しい 良い 若い 増える からむ しでかす しる ふれあう 咲く 待つ 撮る 暮らす 溶け込む 生かす 異なる 結びつく 見せる 見る 見れる 桜 芸術性 駅舎 さとうりさ マッチ 世界 大井川鐵道 好き

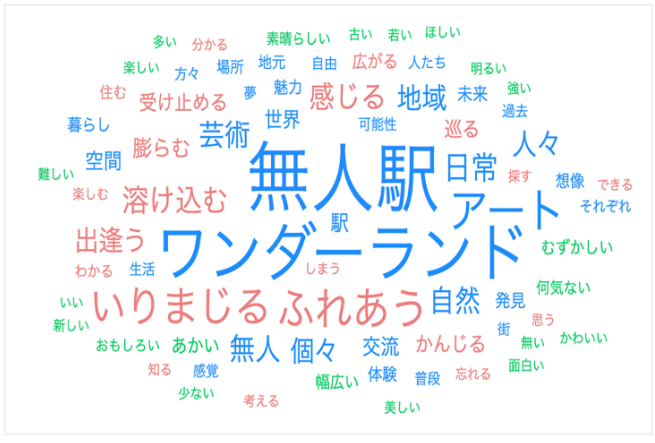
（2）無人駅の先のワンダーランドとは何か

「無人駅の先のワンダーランド」という文言は、本芸術祭のキー・メッセージである。この質問に対する答えを見ることで、そのメッセージがどのように参加者に伝わっているのかを知ることができると考える。KJ 法で整理すると、鑑賞者の興味の先が「自身の内的感覚の変化や想像の世界」が主であったが、2020 年は大幅に「地域、場、日常」が増えていることがわかる。これは期待感の項目でも同様の結果が出ており、芸術祭をきっかけに興味の先が確実に地域への広がりを見せている。テキストマイニング分析結果を見ると、「無人駅の世界」から「アートと地域」へ、また品詞は形容詞から動詞へと変化しており、範囲の広がりとアクティブワード（自分も参加する気持ち）の傾向が見られる結果となった。

KJ 法による整理と結果



テキストマイニング分析結果



名詞

2020	単語	2019
27	無人駅	73
34	日常	66
23	世界	77
30	ワンダーランド	70
80	アート	20
64	自然	36
32	駅	68
84	地域	16
0	感覚	100
23	人々	77
60	場所	40
55	想像	45
55	芸術	45
29	未来	71
29	空間	71

動詞

2020	単語	2019
50	感じる	50
68	思う	32
100	分かる	0
100	受け止める	0
100	探す	0
100	膨らむ	0
86	考える	14
30	できる	70
30	わかる	70
68	ふれあう	32
81	かんじる	19
100	いく	0
100	おく	0
100	たどりつく	0
100	でる	0

形容詞

2020	単語	2019
0	無い	100
75	いい	25
0	おもしろい	100
100	楽しい	0
66	素晴らしい	34
0	あかい	100
0	かわいい	100
0	すごい	100
100	ほしい	0
0	むずかしい	100
100	よい	0
0	何気ない	100
0	古い	100
100	多い	0
100	少ない	0

2-6.8.事業の持続発展性に向けての教訓抽出

以上のような UNMANNED の効果を持続的に生み出すために、どのような運営体制を作ることが効果的だろうか、今後の運営のために教訓を抽出して、まとめておく。運営体制やプロセスを振り返るために、次の 3 つの問いを立てていた（評価グリッドより）。

（A） 効果を生み出すための運営体制はどのようなものか？
（B） 効果を生み出すための運営プロセスはどのようなものか？
（C） 企画運営面での自立発展性はどのくらいあるか？

（A）効果を生み出すための運営体制

この 3 年間はほぼ主催のクロスメディアしまだが主導をして運営を行なった。文化・芸術分野の専門性はないが、自分たちで、アートディレクター・アートプロデューサーの役割も担ったとのことである。専門性がない分、アーティストへの一方的な依頼や指示ではなく、どのようにすれば良いのかを地域目線で一緒に考えたそうである。アーティストとの信頼関係があり、あとはアーティストが協力的な地域住民とコミュニケーションをとって、どんどん物事が進んでいったそうだ。ただし主催側は、運営体制を強化してより持続可能なものしていくことを課題と感じており、3 年目である 2019 年度にはじめて推進委員会形式を導入した。また去年からコアサポーター制度を導入して、協力者が増えているそうである。ブンプロ PC の立石氏からは「芸術祭の魅力を生み出す源泉は、クロスメディアしまだの大石氏と兒玉氏の人間的な魅力である」というコメントがあった。行政や大井川鐵道、自治会などを巻き込む持続的な運営体制を構築しながら、今年度明らかにした効果を生み出すために、上記のアーティストとの信頼関係や地域住民の主体性をいかに発揮していけるかが大事なポイントとなるだろう。

（B）効果を生み出すための運営プロセス

今年度の事業評価によって、運営プロセスにおいて、アーティストと地域住民の交わりの深さが、効果の発現に大きく関わっていることがわかった。ヒデミニシダ氏の作品「境界のあそび場／うかぶ縁側」や北川氏の作品「せんべや」の制作過程においては、アーティストが地域住民に相談したところ、あっと言う間に倉庫から原材料が運び込まれたり、展示スペースの片付けが完了したという。また作品の価値を高めるためにはアーティストの地域に対する理解度が大きく起因しており、アーティストが地域のことを知るためのリサーチ時間や、地域住民との信頼関係構築のための時間が重要であることが、複数のアーティストへのヒアリングから示唆された。またアーティストが心地よく芸術祭に関わり創作活動を行えることも UNMANNED の大きな魅力と特徴である。アーティストへのヒアリングでは、「他の芸術祭ではアーティストがもやっとすることや嫌な思いをすることが少なからずあるが、UNMANNED ではそれが一切ない。主催者の気配り・心配りが素晴らしい」ということを話していた。これからもより良いアーティストと地域住民の共創を生み出していくためにも、上記を意識した運営プロセスに配慮していく必要があるだろう。

地域住民のサポーターたち

（C）企画運営面での自立発展性

大井川鐵道の沿線は島田市と川根本町の 2 つの行政区域にまたがっており、企画運営面での自立発展性を高めていくには、市町村単位だけではなく県域として本芸術祭を捉えていくことが必要であろう。静岡県という視点で本芸術祭を見たときに、継続的な財源獲得可能性以外にも様々な資源の巻き込みの可能性があるのではないか。主催者によると、3 年目は様々な属性の人たちが交流できる機会が増えたようで、地元と学生の交流をしたり学生を交えたアートプランができてきたり、アートの制作過程には地域の障害者が通う特別支援学校からも自然に声がけがあったという。このように多様な市民の参加が増えてきていることは、ブンプロの目標のひとつである「多様性と包摂性」に貢献するであろう。自立発展性を高めていくためにも、このように多様な人々が関われる間口や余白を設けておくことが重要になるであろう。

3.まとめ・今後の提言

以下に、まとめと今後の提言を記載する。

3-1.まとめ

今回の事業評価では、関係者とのディスカッションを通して UNMANNED の価値とそれが生まれるメカニズムを模式化した。次にそれぞれのステークホルダーに実際にどのような効果が生まれたのかの仮説を立てた上で、実際にデータを集めて検証した。その中で特にキー・メッセージである「無人駅が開くと、地域が開く」というアウトカムを以下の 1〜3 のように定義して、達成度を測るためにルーブリックを構築した。そして地域住民やアーティストなどへのヒアリングによってデータを集めて、その達成度の測定を実施した。

1. **アーティストが、地域住民が気づかない視点の提示、地域の魅力の発掘している**
2. **地域住民が、地域の魅力・価値を再発見する**
3. **地域外からの芸術祭参加者やアーティストが、“地域のおもてなし”を感じる**

達成度のアセスメントは、UNMANNED 2018 開始前はすべて「1」で、UNMANNED2020 終了後が 1〜3 ともに 4 段階中「3」〜「4」であり、この 3 年間の芸術祭によってアーティストの魅力の発掘の度合い、それによって地域住民が自分たちの地域の魅力・価値を再発見する度合い、そして地域外からの参加者である芸術祭参加者やアーティストが、“地域のおもてなし”を感じる度合いが大きくなってきていること、つまり「無人駅を開くことで、地域が開かれた度合い」がわかるであろう。効果を生み出すための運営体制、運営プロセスの整理をおこなったので、それも参考にしながら自立発展的な成長を期待したい。

評価設問	評価基準	ルーブリック（4段階）	
		事業開始前（2017年４月）	3年間の事業実施後（2020年3月）
１．アーティストが、どのくらい地域の魅力を発掘できたか？	地域の魅力の発掘の度合い	1	3
	地域の魅力の広がり	1	4
２．地域住民が、どのくらい自分たちの地域の魅力に気がついたか？　また、その人数はどのくらいか？	地域住民の内面的な意識の変容度合い	1	4
	地域で文化・芸術に関わった人数	1	3
３．地域住民が、どのくらいおもてなしの心を持って、外部者（芸術祭参加者・アーティスト）とコミュニケーションが取れるようになったか？　また、その人数はどのくらいか？	地域住民からのおもてなしを感じた芸術祭参加者の割合	1	3
	地域住民からのおもてなしを感じたアーティストの割合	1	4

3-2 今後の提言

今後の提言として、以下 4 点をまとめる。

1）重要なステークホルダーが合意するアウトカム指標の設定

UNMANNED が継続的な運営をおこなっていく上で重要なステークホルダーである行政や大井川鐵道等に、より一層活動の価値・意義を理解し行動してもらうために、今後関係者の納得感の高いアウトカム指標を設定することを提言したい。関係者で共通の成果、つまりアウトカム指標の認識を持つことで、目標の確認と合意ができるだろう。重要なステークホルダーとこのような共通価値の認識を深めることが、持続可能な運営の仕組み・事業モデルづくりを行う上で土台となる。

2）ルーブリックの精緻化

上記のアウトカム指標に関連するが、アウトカム指標にあわせて測定の精度を高めていくために今回作ったルーブリックを重要な関係者とともに見直すことを勧めたい。ルーブリックが合意できると、それを継続的にモニタリングしながら成果の達成度の把握を行い、関係者と進捗の確認だけでなく、成果を高めるためのコミュニケーションを取っていくことができるようになる。

3）芸術祭参加者に対する価値の測定

今回は制約上、芸術祭参加者に対する調査は限定的に行なった。今後、実際に芸術祭に参加した地域外の人がどのような価値をどの程度感じたのかを拾うために、芸術祭参加者に対する調査のアプローチを考えることが必要かもしれない。芸術祭の時に取っているアンケートに設問を加える、またはリピーターにインタビューを行うなどで情報が拾えるだろう。

4）参加型評価[5]のアプローチ

今後、より関係者を巻き込んで彼らが納得しやすい形で評価を進めていくことが、運営体制の強化にもつながり、さらに高い成果を生み出していくことにつながるであろう。本事業は多様なステークホルダーが参加して成り立つ事業であるので、参加型評価やエンパワーメント評価といった評価の手法を活用することは一案であると考える。これによって、事業を担う主体の学習と事業改善に活用されやすく、主体性を高めることにつながると考えられる。また関係者にとって納得感のある説明責任を果たすこともできる。

■評価者と本評価の問い合わせ先

一般財団法人ＣＳＯネットワーク
担当：千葉 直紀
eval@csonj.org（TEL：03-3202-8188）

[5] 受益者を含めた利害関係者（ステークホルダー）が、評価プロセスに参加することで、プロジェクト理解、当事者意識高揚、能力開発などを通じてエンパワーメントや事業・組織の改善に貢献することができる評価アプローチである（田中）。